

2003, 10, 5

「イラク戦争とアルジャジラ」 <戦争報道を考える>

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)
Toshiyuki/Maesaka

1. 最初の犠牲は真実

戦争とメディアの関係、戦争報道について「戦争が起これば、最初に犠牲になるのは真実である」という歴史的な至言がある。

英国のベテラン戦争従軍記者・ナイトリーが過去約120年間の戦争報道の歴史を調べたジャーナリズムの古典的名著(1987年刊行)のタイトルだが、ナイトリーはの中で戦争当事国のメディアへのきびしい検閲、プロパガンダ(宣伝)、情報操作による真実の隠蔽、一方メディアも愛国的になって真実への目をくもらせてしまう、など戦争とメディアの数々の歴史的な法則を明らかにしている。

イラク戦争の戦闘終結からちょうど半年、戦争熱もすっかり冷めた今、歴史の中でもう一度、冷静、客観的に戦争報道をふりかえるチャンスでもある。

第一の法則は「戦争は情報操作によって引き起こされる」という点だが、満州事変(1931年)、ベトナム戦争での米国の全面介入となったトンキン湾事件(1964年)など、相手国が先に攻撃してきたというウソの発表、情報操作によって戦端を拡大したケースが枚挙にいとまない。

今回はどうだったのだろうか。

イラクの大量破壊兵器、生物兵器の保持と隠蔽が英米連合軍の先制攻撃の大義名分となったが、いまだに発見されていない。それどころか、虚偽の発表、情報操作の事実が次々に明らかになり、ブッシュ、ブレア政権は窮地に陥っている。

第二の法則「最初に報道の自由が血祭りにあげられ、メディアが犠牲になる」という点はどうなのか。

91年の湾岸戦争やアフガン戦争ではプール取材でメディアは戦場から排除された。

今回はベトナム戦争以来、エンベツ取材(部隊への埋め込み)で世界各国から600人の記者が従軍したが、一方、アラブの視線を伝え続けたカタールの衛星放送「アルジャジラ」

ーラ」に対しては徹底した圧力が加えられた。短期間に 18 人ものジャーナリストが戦場で犠牲になった戦争も珍しい。

2・「アルジャジーラ」のスター記者が逮捕される

この九月初めには、この戦争で最も有名な従軍記者の「ビンラディン」のビデオ映像を報道し、バクダッドからもリポートした「アルジャジーラ」のスター記者のタイシール・アツルーニ特派員がスペインの自宅で「アルカイダの協力者であった」という容疑でスペイン警察によって逮捕、起訴された。

「アルジャジーラ」はでっち上げによる不当な逮捕として、アラブ人権委員会も抗議声明をだした。

「アルジャジーラ」のイラク戦争報道の指針はどのようなものなのだったのか。筆者はこの八月末、カタールの「アルジャジーラ」本社を訪ねて、アドナン・シャリフ氏(編集責任者)に確認した。

「私たちの編集方針は『一つの意見もあれば、もう一つの意見もある』ということで、戦争もこの方針で取り組みました。両方の意見を伝え、公平性や中立性を保とうと追求し続けて、イラクの旧政権からもアメリカ政府からも脅されました。私たちは双方から攻撃されるのです。どこかで紛争があった際には、双方から反対されるのです。私たちの編集方針や批判精神にこだわり続けたからなんです」

シャリフ氏が答えた放送センターの一角には米軍の銃弾に倒れた記者の遺影が飾られていた。

「アルジャジーラ」は英国BBCのアラビア語放送に従事していたアラブ人ジャーナリストが移籍して、96年にアラブで初めての自由なメディアとしてスタートした。

米英流の民主主義の根本である客観報道主義を学んで、これをお手本にして忠実に放送したことで、逆に両国から批判、圧力を受けているのは何とも皮肉である。

(おわり)